

カマドの出現

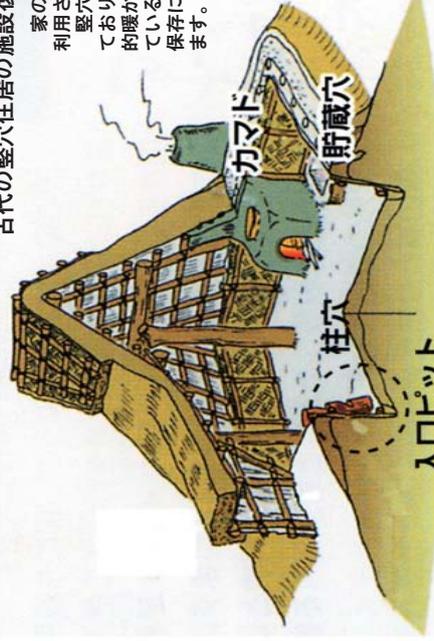
カマドは、5世紀の後半に朝鮮半島から日本に伝わった生活技術です。別名「韓竈(からかまど)」と呼ばれ、地面を掘りくぼめただけの炉にかわり、煮炊きの場を一変させました。カマドの脇には「貯蔵穴(ちよぞうけつ)」と呼ばれる食物貯蔵用の穴(=冷蔵庫)が、近接して設置されるようになるのもこの時からです。調理方法は、水を満たした甕(かめ)の上に甕(こしき)をのせ、水蒸気を利用して米



竈(かまど)の近景
 家の中が台所的な空間として利用されていた部分。竈(かまど)は、煮炊きの場を一変させました。カマドの脇には「貯蔵穴(ちよぞうけつ)」と呼ばれる食物貯蔵用の穴(=冷蔵庫)が、近接して設置されるようになるのもこの時からです。調理方法は、水を満たした甕(かめ)の上に甕(こしき)をのせ、水蒸気を利用して米

竈(かまど)の近景

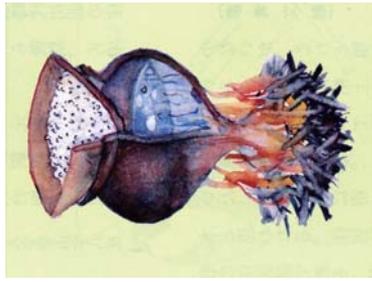
古代の竈穴住居の施設復元図



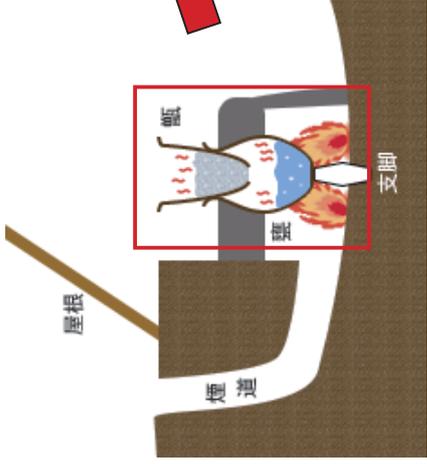
家の中が台所的な空間として利用されていた部分。竈(かまど)は、煮炊きの場を一変させました。カマドの脇には「貯蔵穴(ちよぞうけつ)」と呼ばれる食物貯蔵用の穴(=冷蔵庫)が、近接して設置されるようになるのもこの時からです。調理方法は、水を満たした甕(かめ)の上に甕(こしき)をのせ、水蒸気を利用して米

竈(かまど)の出現により、それまで住居の中央にあり火災防止に注意が置かれていた炉は、住居跡の北側へと移動し煙突(えんとつ)とつ煙道(えんどう)を持つカマドが確立されました。これにより住居内に一定量溜まっていた煙は排除され、代わりにそれまでこの煙を利用していたと考えられる「燻製(くんせい)」は別の場へと移動したと考えられます。代わりにカマドの脇には「貯蔵穴(ちよぞうけつ)」と呼ばれる冷蔵庫的な機能を持っていたと推測されていたと推測されています。このカマドの形態はガスが普及した戦後すぐの頃まで使用されていたものとほぼ同じ形態機能を有していたものでした。

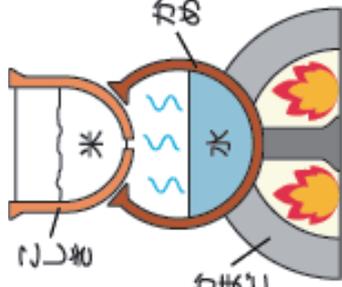
を蒸す方法は以前から行われていましたが、カマドの伝来とともに定着しました。写真のカマドは帆立山遺跡(大字馬込字八番)から発見された6世紀後半のもので、煙出しの穴や、甕を下から支える支脚(しきやく)がそのままに残っています。支脚は、円柱状の土製品が多く使用されていますが、製鉄関連の羽口(はぐち)：火力を上げるための空気送風用品)や土器の転用品なども多く再利用されていました。



弥生時代から古墳時代の調理方法



カマドと甕・甕の設置方法



カマドと甕・甕の設置方法(拡大図)

甕の下には、甕を支える支脚(しきやく)が設置され、落下防止も兼ねています。

【古代の調理方法】

現在の米は、「ご飯を炊く」という言葉のとおり、煮る調理方法ですが、古代の調理方法は上図のとおり、水を入れた甕(かめ)の上に甕(こしき)と呼ばれる底に穴の開いた土器に布などにより、米が落ちないよう

紡錘車(ぼうすいしや)

紡錘車(ぼうすいしや)とは、繊維(せんい)に燃(よ)かりをかけて糸を紡(つむ)ぐ時に使う「弾(はず)み車」のことです。紡錘車には土製、石製、鉄製がありますが、土製は弥生時代から古墳時代前期に多く、石製は古墳時代中期以降から平安時代まで使われています。石製のものは蛇紋岩(じやもんがん)や滑石(かっせき)片岩(へんがん)などの比較的軟らかく加工のし易い石を利用して加工してつくられます。鉄製は古墳時代から僅かに使われ始め、平安時代に多く使われるようになります。ただし、鉄製が増加していても平安時代でも石製が使われなくなることにはなかつたようです。

石製紡錘車の中には、文字や絵また放射状の刻みを持つものがあります。書かれている文字は人名と地名が多く、市内でも御林遺跡(おはやしせき)：市役所周辺(おはやし)から「武蔵」の文字の刻まれたものが出土しています。



石製紡錘車の断面形



糸を紡(つむ)ぐ様子

時代を超えた蓮田への流通品

蓮田や周辺地域で特徴的なことは、地域的に現在でも河原に石がないことから分かることと、古墳の石室の使用される石材のほとんどを他の地域から得ていることが挙げられます。石材は非常に重いものであり、舟運により運ばれたことが想像できます。石材には秩父を原産地とする緑泥片岩(りよくでいへんがん)が久喜市打出塚(うちでづか)古墳、杉戸町目沼3号墳で、群馬県榛名を産地とする角閃石安山岩(かくせんせきせきあんざんがん)が春日部市内牧(うちまき)古墳群、杉戸町目沼(めぬま)古墳群で、「房州石(ぼうしゅういし)」と呼ばれる千葉県鋸山(のこぎりやま)を産地とする石が杉戸町目沼古墳群から検出され、石室石材が河川交通を利用して運ばれてきたことが推測されます。特に房州石は非常に特徴的であり、下流の葛飾区柴又八幡神社古墳や北区赤羽台古墳群でも発見されており、河川交通の中で運ばれてきたことが想像されます。また、さらに上流にある埼玉古墳群の中でも利用されており、行田市埼玉へと続く当時の河川が大きな規模を有していたことが想像でき、その中継点的な位置に目沼の地があったことも想像可能となります。緑泥片岩や角閃石安山岩も同様に河川交通を利用して運ばれてきたものであり、当時の河川流路を推測することは非常に重要な問題点となります。なお、蓮田市内の古墳にはこれら以外の石は使用されず、「硬砂層(かたすなそう)」と呼ばれる硬い地層の砂を利用してることが最近判明しています。

出土品でも東部地域の交易を裏付けるような例があり、「**武蔵型(むさしがた)埴輪**」と「**下総型(しもさがた)埴輪**」が挙げられます。名前のとおり武蔵型埴輪(写真右)は武蔵国の古墳に特徴的な埴輪であるのに対し、下総型埴輪(写真左)は下総国に特徴的なものです。武蔵国側の春日部市内牧古墳群塚内(つかない)4号墳で下総型埴輪が、下総国側の杉戸町目沼古墳群では武蔵型埴輪が出土しており、中川低地を挟んで位置する地域間の交流が窺える一例です。

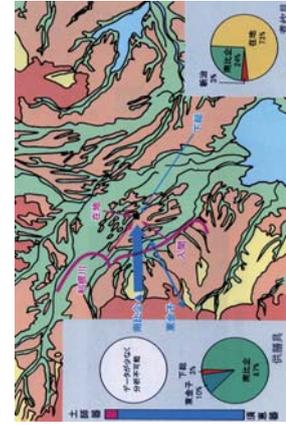
荒川附遺跡(関山3, 4丁目)は元荒川右岸の大規模な集落で、元荒川の舟運の中継点となる河岸場(津)であると推測されています。古墳時代後期の関東地方では、土師器や須恵器といった土器が用いられていました。遺跡から出土した土器を観察すると、土師器は7世紀前半以降、利根川流域の胎土を用いて製作された製品が多く出土する傾向にあり、元荒川を用いた流通網が活発化したことが窺(うかが)えます。また、須恵器は埼玉県大里郡寄居町に所在した末野窯跡(すえのようせき)群の製品が

須恵器と土師器

利根川から元荒川經由で、静岡県湖西市に所在した湖西(こさい)窯跡群の製品が東京湾から元荒川を溯上して本遺跡に搬入されており、本遺跡が元荒川を媒介とした河川交通の要衝(ようしゅう)に位置していたことが想像されます。奈良時代に入っても大規模な集落が営まれていたようであり、遺跡から出土した須恵器を観察すると、南比企(みなみひき)窯跡群の製品が圧倒的に多く、東海地方からの須恵器の供給はみられなくなりました。しかし、東北地方では製作されたと推定される土器が出土しており、遠隔地との交流が途絶えただけではないことがわかります。

周辺地域の須恵器の産地を概観すると、西側に位置する地域、すなわち古代において武蔵国に所属していた蓮田市では武蔵国産の須恵器が圧倒的に多く、東側に位置する地域、すなわち古代において下総国に所属していた旧庄和町では下総国や常陸国産の須恵器が優勢であり、ちよと中間地点に位置する春日部市では東側から西側への供給量が概ね均衡する状況にあることを確認することができました。このことは**古代における商品の流通範囲が生産地からの距離によって大きく制限されていた**ことを示しているとも考えられるのではないのでしょうか。

また、中世でも蓮田市大字馬込にある綾瀬川の自然堤防上には、通称「寅子石」と呼ばれる県内で最大級の板碑があり、中世(鎌倉時代)に入っても板碑を流通品として捉えられた場合、やはり河川との関わりは無視できないものと想像することができます。



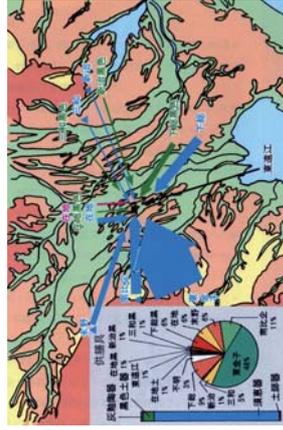
9世紀前半の流通(荒川附遺跡)



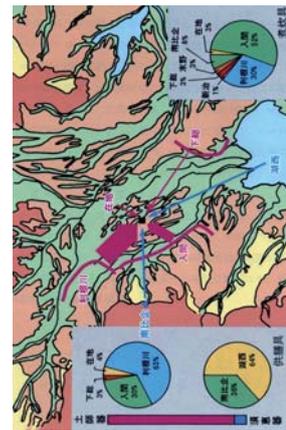
11世紀前半の流通(榑山遺跡)



8世紀前半の流通(荒川附遺跡)



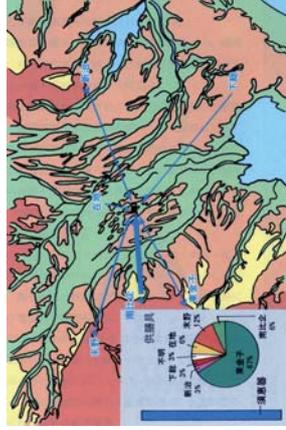
10世紀前半の流通(榑山遺跡)



7世紀前半の流通(荒川附遺跡)



10世紀前半の流通(荒川附遺跡)



9世紀前半の流通(榑山遺跡)

須恵器の流通は、古墳時代の中頃(5世紀中頃)には始まりませんが、蓮田の地まで入ることには稀であり、7世紀前半頃から須恵器の流通が多くみられるようになります。7世紀代は古墳時代の終わりに傾き、真海地方(湖西)産がその半数以上を占めていたことが、8世紀に入り、その地元の武蔵国産の比企窯跡群産が主体となります。9世紀には榑山(こくし)産が主体となります。10世紀には南比企産が引き続き主体的な位置に取って代わり、須恵器では真金子産が主体ですが、黒色磨研土器(こくし)よりまげんと産)とも呼ばれる内面は黒色をした土器が半数近くを占め、この主体は下総国が主体を占めています。



寅子石

露呈している部分で高さ4mあり、地中部分も含めると5mを優に超える大きさと想像されます。



荒川附遺跡の川の津(復元図)



春日部市内牧古墳群塚内4号墳出土埴輪。蓮田市内の古墳からは、埴輪の出土は無く、遺跡内から僅かに破片が2片出土しているだけです。